

Letter from Robert Aitken to Rick Fields

ロバート エイトケン老師より、リック フィールドへの手紙

1981年1月29日

私の親愛なるリック

十方. 模範とすべき千崎先生に関する貴方の手紙は、私の接心半ばに到着しました。昨日、接心も終わり、大急ぎで貴方へ手紙を書いております。私の昔の先生に関しての、貴方の手紙はほんとうに嬉しく懐かしく、一挙に私は懐郷の思いに浸りました。優れた学者たちの調査に漏れたと思われる千崎先生の物語を私も少し付け足しましょう。

1. 千崎先生が円覚寺へ行かれた時、先生は結核を病んでおられ、それも悪化しつつある状態でした。そのため、ここ1-2年の間、他への感染を恐れて先生は小さな小屋で、隔離住まいをしておられました。食事はその都度小屋へ運ばれ、釈 宗演禪師もたびたび訪ねておられました。そんなある時こんな会話が交されました。

千崎：私が死んだらどうなるのだろう。

釈：君が死んだら、ただ死ぬだけだ。

そのうち、彼の病状が少しずつ回復してまいりました。何ヶ月か後、長い間開けてもみなかった箆箭の引き出しを開けて、整理をしておりましたら、宗演禪師との会話の後止めてしまった葉が出てきました。

2. ミセス 棚橋さん、禪名-しゅうびんは、先生が、ロスアンジェルスの特ナー通りへ移った頃の主な支持者でした。先生は彼女が働きに出かけている間、彼女の障害者である息子の世話をした事もあり友達になったのです。彼女は日本菓子店 “ふげつ堂を経営しており、先生の第一の支持者でした。戦争中、二人は同じ収容所の住民でもありました。ミヤコホテルの持ち主が変わって、先生が無料住居を失ったときも、彼女はボイルハイツ、第2通りにある彼女の家の向かえにあったアパートを借りて千崎先生を迎え入れました。私たちアメリカ人は折ある毎に、なんドルかを手渡しましたが、彼の生活費はミセス棚橋によってすべて賄われました。宗淵老師の1958年までの渡米費も殆ど彼女によって支払われました。もし今も彼女が生きておれば80歳代でしょう。
3. 栄道老師の渡米計画に関する年譜は、私の記憶と少しちがいます。1950年8月から1951年8月まで、約1年間私は日本に住んでいました。1951年1月末までは北鎌倉、建長寺のぜんきょう庵に、その後は在日最後まで龍沢寺ですごしました。タイさんはまだここにはおりませんでした。私はハワイへ帰りここで2年ほど暮らしました。1953年の暮れか1954年の始め、ロスアンジェルスへ行き、千崎先生のもとで再び禪の修行をはじめました。私が千崎先生と再会してすぐ、先生は宗淵老師から龍沢寺の一人の僧を先生の侍者として受け入れてほしいと言ってこられたけれども、自分は日本人僧を訓練して、将来師としてアメリカ人の弟子を育てることのできる人間に教育するには年を取りすぎている、第一に自分の住まいは狭すぎる（寝室一部屋のみ）という理由で断られたということでした。

しゅうびんさんが何時日本へ行かれたか私は知りませんが、多分先生が日本へ行かれた少し後、1955年か1956年の始め頃だと思います。何年か後彼女はタイさんの印象を私に語りましたが、同様に先生にも話したそうです。

アンと私は1957年の夏日本で過ごしました。龍沢寺で6月18日から25日まで接心、その後京都へゆきました。京都滞在の前半はタイさんと龍沢寺在住のフランス人禅弟子、マニュエル チェネイユが同道でした。彼らは7月接心のため寺に戻り、(夏期修行として最後の接心)私達は残って、京都と奈良見物をいたしました。7月末私達は龍沢寺へ戻り、宗淵老師と共に旅にでました。富士登山もいたしました。8月私達は宗淵老師について、東京の近くの所沢にあるらいこう寺を訪ね安谷白雲老師のもとで接心に参加いたしました。将来の師となる安谷老師との初の面会でした。この接心は、宗淵老師の指導でおこなわれました。その後私達は龍沢寺へ戻り短期滞在の後、カリフォルニアへ帰国しました。

1957年6月半ば、私達が龍沢寺へもどった最初の日、タイさんに会いました。翌日タイさんから面接の申し込みがあり、中庭の側にある小さな客用の離れの一室で話をいたしました。彼は禅僧としてアメリカへ行きたいと熱心に語りました。千崎先生の“アメリカに骨を埋める”という誓いに感銘を受け、自分もそのようにしたいということでした。私達が推測した限りでは、彼は宗淵老師の嗣法を目指しているように見受けられ、もし宗淵老師のお気に入りの弟子がアメリカへ来る事になれば、宗淵老師の訪米のチャンスも増えるであろうと思ったのです。タイさんはこれらの話し合いは宗淵老師の耳には入れぬようにと頼むので、私達は帰国後手紙で連絡を取ることを約束し、彼の希望どうりにはからったのです。

カリフォルニアのオジアイにあるハッピー ヴァレー スクールの職場に戻るとすぐ私達は、1958年6月退職を届け出ました。退職直後私達は息子の近くで暮らすためハワイへ引っ越しました。千崎先生は5月に亡くなられ、葬式と埋葬のため宗淵老師が日本からこられました。(貴方の報告によればこの二つの儀式は同時に行われました)宗淵老師は此の夏2回の接心を指導されました。私はこの最初の接心に参加し、二度目の接心が始まる前にハワイへ帰りました。

1959年10月私達はホノルルに落ち着き、ダイヤモンド僧伽を設立しました。そして翌夏タイさんが私達の寺の逗留僧として参加し、1964年まで同じ名目で滞在了ました。

千崎先生は1955年、ルイス パデルフォードとルース ストラウト マッキヤンドレスを伴って日本へゆきました。何年か後、カリフォルニア、サン ホゼ の近く、サン ワン ボテイスタで宗淵老師による接心が行われ、その後で、ミス マッキヤンドレスが栄道老師に向かって、私に聞こえる声で“龍沢寺で会った時、貴方は僧としてアメリカへ行きたいから援助してほしいと言ったのをおぼえているでしょうか？あの時援助出来なかったけれど、今こうして老師になっていらっしゃる”彼女はそれ以上何も言いませんでした。

もし将来、出版の折この年譜を書き直すならば、私の記録を情報源の一つとして使用されるようお勧めします。私の説のみを全面的に取り上げず、少なくとも他にもう一つ私の説とおなじ情報があった場合に限り採用して下さい。私は私の記憶が他の人の記憶と相反した場合の争いを避けたいと思います。

いずれにしても、これらは皆些細なことです。貴方の情報は殆ど皆正確です。此の上さらに、この老人の性格として鋭い直覚を付け加えて頂ければ、私は満足です。

合掌